



1925年(大正十四年)六月二十五日、二十六日

一夜を東北本線の汽車中に過し廿五日正午函館着直ちに湯の川通  
 時任邸に至った。一同の大歓迎を受けた。午後五時當家次男幸次對  
 三浦浩子の結婚式を司った。出席者五十名と越えず名家の結婚式と  
 しては至つて質素なるものであつた大に我意に口しい非常に喜しかつた。  
 約翰傳二帝カナの結婚式に於て主が水を変えて葡萄酒に  
 なし給ひ共慈義い就て語つた。因ち普通の物を化して甘  
 き意味あるものに成し給ふと。

時任家は舊開拓使時代よりの名家であり之に福音入り子女  
 十一人盡く信仰せしめ成長せしを思い北海道に關係深き自分  
 としてはその為ニ視察を祈らざるを得ずと思ひ今回態々遠路  
 此地に來つた次第である。

翌廿六日は函館に於ける樂しき一日であつた。朝新太郎  
 新婦と共に自會社と写真の時任家經營の上磯牧場に行つた。  
 風景を眺むる後茅屋に裸臥を許し雲夜を隔きつ午膳を食つた。  
 五月時遠愛女学校の夕の礼拝に臨み一場の講話をなして歸つた。  
 夜十一日同一に送られて湯に就いた。波静かなる船中の旧臣は安かつた。

内村先生の日記より掲載

